

北村哲久

小学校における胸骨圧迫心肺蘇生トレーニングと小学生の救命意識変化 PED-00097-2015

背景

学校教育における小学生に対する体系的な心肺蘇生(CPR)トレーニングの有効性についてはほとんど知られていない。

方法

我々は大阪府豊中市の17の小学校において10歳から12歳までの5年生ならびに6年生に対して胸骨圧迫の方法と体外式除細動器(AED)の使い方に関する体系的な心肺蘇生トレーニングを導入し、トレーニング前後における救命意識の変化をアンケートにより評価した。さらに学校教育における心肺蘇生トレーニング実施について親ならびに教師の意見も調査した。1次評価項目は5段階リッカート型質問において、「そう思う」もしくは「少しそう思う」の2つで定義される、小学生の心肺蘇生に対するポジティブな態度とした。

結果

合計2047名の小学生がCPRトレーニングを受け、その内1899名(92.8%)が心肺蘇生トレーニング前後でアンケートに回答した。「もし知らない人が目の前で倒れたら、声をかけて、119番通報など何かできることをしようと思えますか?」という質問に対して、トレーニング前に50.2%が「そう思う」、30.3%が「少しそう思う」と回答した。トレーニング後には75.6%が「そう思う」、18.3%は「少しそう思う」と変化した。心肺蘇生トレーニング前に心肺蘇生に対してポジティブな態度を示さなかった生徒の72.3%(271/370)が、トレーニング後にポジティブな態度に変化した($P<0.001$)。ほとんどの生徒がトレーニングによって胸骨圧迫の方法(97.7%)とAEDの使い方(98.5%)を理解した。多くの親(96.2%[1173/1220])や教師(98.3%[56/57])は、学校教育で子供が心肺蘇生トレーニングを受けることは「良い」「まあ良いと思う」と回答した。

結論

体系的な胸骨圧迫心肺蘇生トレーニングは小学生の救命意識の改善に役立った。